

▶ 生まれた町ヴィヤリストクとは

ザメンホフが生まれ育った当時のヴィヤリストクは、帝政ロシアの支配下にありました。現在そこは、ポーランドの地で、ベラルシーの国境に近い東部に位置し、またリトアニアにも近いところですが、そのため、ザメンホフをポーランド人として誤って記述されていることもあります。彼はユダヤ人の両親の下に生まれました。父は教育者でしたが宗教にこだわらず、いわば無神論者です。しかし母親はユダヤ教を信仰していました。この両親の長男として、ルドヴィーコ・ラザロ・ザメンホフは、1859年12月15日に生まれました。その後、4人の息子と3人の娘が生まれました。

ヴィヤリストクにいた多くのユダヤ人たちは、イディッシュ語を使っていました。それはドイツから東欧に来たユダヤ人たちが使っている言葉で、ある革命家は「崩れたドイツ語」と揶揄したように極めてドイツ語に近いもので、主にロシアや東欧圏のユダヤ人の共通語でした。

『屋根の上のヴォイオリン弾き』という有名なミュージカルがあります。その原作がイディッシュ語で書かれた小説『牛乳屋テビエ』です。作者であるショレム・アレイヘムはイディッシュ語でいくつもの作品を書きました。この小説の舞台はウクライナです。当時のオデッサ(ウクライナ)やワルシャワ(ロシア領ポーランド)、そしてミンスク(ベラルーシ)などにいたユダヤ人の多くはイディッシュ語を使っていました。

▶ 4つほどの言語が行きかう町

ヴィヤリストクの市場や通りでは、支配者の言語であるロシア語が大手を振る一方、ポーランド語やドイツ語、そして多数派であったユダヤ人たちが話すイディッシュ語など、それぞれの民族の言葉が違うため、ちょっとした買い物でも誤解が生じ、人々

の間ではいつも喧嘩が絶えませんでした。とりわけユダヤ人たちは工業や商業分野で活躍しましたが、独自の信仰を持つ人や独特の服装をする人などもあり、周囲のキリスト教徒たちから蔑まれていました。

喧嘩になると野次馬が集まってきます。警官が仲裁に入って来ると田舎から出てきたリトアニアの女がリトアニアの言葉で文句を言います。警官にはその言葉はわかりません。「ここはロシア皇帝の領土だ、ロシア語で言え! 百姓言葉はダメだ」と警官が威圧的に言うと、「それは違う!」と、ポーランド人が叫ぶ。その男はたちまち捕まり、銃剣に取り囲まれ連れていかれます。周囲の人たちはじっと黙っています。ポーランド人たちはみんなこの男に敬意を表します。しかしドイツ人やユダヤ人は脱帽しません。「これで、あいつは俺たちに毒づくのをやめよう」と、あごひげのユダヤの老人はつぶやきます。ポーランド人は怒りに燃え、ロシア人の目には嘲りが浮かびます。

ラザロ少年は小さい時からこの様子を見て悩み、「人間はみんな兄弟だと教えられていたのに」と思い、「今に大きくなったら、きっとこの不幸をなくしてみせるぞ」と絶えず独り言を繰り返す少年でした。言葉が通じないために争いや誤解が生まれる状況を見て育った

ザメンホフは、そこから一つの言語への夢をはぐくんでいくのです。

▶ 人類のための共通語を!

その後ザメンホフ一家は、ヴィヤリストクからワルシャワに移り、ザメンホフは選ばれてモスクワ大学医学部に入学します。同級生には、後に作家になったチェーホフがいました。しかしユダヤ人故に家庭教師にもなれず、学費も続かなくなりワルシャワに戻りました。1881年の夏のことでした。

混迷の時代を拓くザメンホフの人類主義「私は人類の一員だ!」(II)
ザメンホフはどういう人だったのか

ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』

大類 善啓(おおるい よしひろ)

その年のクリスマスのワルシャワで、ユダヤ人への大虐殺(ポグロム)が起きました。ザメンホフ一家は3日間、地下室に隠れ、なんとか命拾いをしました。ザメンホフはこの悲痛な体験をし、改めて現実には甘くないと思いました。しかし、人類のための一つの言語の夢をどうしても捨てることができなかったのです。

現実には、ポーランド人はロシア語を嫌い、ロシア人はドイツ語を好まず、ドイツ人はフランス語が堪えられない。フランス人は英語を受け入れないだろう。そういう現実を見るほどに、より世界共通語の必要性を感じました。

諸民族がお互いによく知り合い、人々が自由に意志を通じさせれば、他民族の人たちも自分たちとまったく同じ人間であることがわかるだろう、とザメンホフは改めて思ったのです。

自分の母語は大切だが、世界共通語は民族の壁を超えて使うところに意味がある。その言葉は、あらゆる人々にとって易しくなければいけない。そのためには、現存のどんな民族言語にも頼らない中立性を持っていること、発音がやさしいこと、文法は規則的で例外事項は存在しないことなど、ザメンホフはいろいろ考えた末、語彙については語根の大部分をヨーロッパの諸言語から採用しました。ラテン語にもよく通じ、ロシア語やポーランド語なども話せたザメンホフは苦心に苦心を重ねて人類の共通語、エスペラントを創りました。

この言葉はどちらかといえば、イタリア語やスペイン語を母語にしている人にとってはとてもやさしいでしょう。現に私はかつてルーマニアのブカレストだったか、地元のある青年にエスペラントの本を見せたところ、彼はだいたいわかると言いました。ルーマニア語はイタリア語やフランス語などのラテン語系ですから当然といえば当然です。後に詳述しますが、日本や中国でもエスペラントは普及しましたが、アジア人よりヨーロッパの人々の方がエスペラントを学びやすいことは確かでしょう。

こんなエピソードがあります。私の友人がインド人にエスペラントなるものを話したところ、アジアの大国であるインドと日本の言葉を基礎に世界共

通語を創ったらどうかと言われたそうです。しかしヒンズー語と日本語を基に共通語は作れるでしょうか。とても至難のことだと思います。

➤レフ・トルストイやロマン・ロランも共感

何度もポグロム(大虐殺)を受けたユダヤ人たちは一致団結して自分たちの国を創ろう、それしか自分たちを守ることが出来ないとシオニズム運動を起こします。しかし前号で紹介したようにザメンホフは、シオニズムはユダヤ民族主義である、とはっきりとわかってきたので、一時共感したシオニズム運動とも決別しました。

シオニズム活動を通じてザメンホフは、各地から来たユダヤ人たち同士がお互いに共通の言葉がないのを改めて痛感しました。西ヨーロッパなどにいるユダヤ人たちにはイディッシュ語は通じず、エスペラントを世界各地から集まったユダヤ人たち同士の共通語にしたいとも思っていたようです。

1887年、ザメンホフはついに「インテルナツィーア・リングヴォ」(国際語)を、エスペラント博士という名前で発表しました。エスペラントは、〈希望する人〉の意味です。彼はヨーロッパ社会に影響のある知識人らにこのパンフレットを送りました。数年後、ロシアの文豪、レフ・トルストイから「エスペラントを普及することは地上に神をつくることである。これこそ人類の理想だ」という手紙を受け取りました。またロマン・ロラン、マクシム・ゴーリキーからも称賛の手紙をもらいました。

そうした多くの知識人などの影響もあり、徐々にエスペラントは浸透し、1905年にフランスのドーバー海峡に臨むブローニュ・シュル・メールで第1回「世界エスペラント大会」を開くまでに至りました。世界各地から688人の人々が集まりました。集まった人たちはお互いにエスペラントで話しました。お互いの意思がエスペラントですべて通じることを知ったザメンホフは感激しました。

こうしてエスペラントはヨーロッパに広がり、また日本や中国の人々にも徐々に共鳴者を生み出していくのです。(続く)

※参考文献は最終回に列記します